



小生、学校で体罰を受けたことが一度だけある。昔むかしのその昔、中学時代のことなのだが、あれは当方が悪い。何かの都合で授業時間中に教室を移動することになったのだけれど、20数人で校舎の階段を上っていたとき、誰かが、キャットかうわっとかいう声を上げた。その声が階段の高く広い空間にこだまして、なんかとっても楽しく聞こえた。それで皆、自分もやってみようという気持ちになって、次々と声を出し始めた。そしたら、それがうわん、うおん、キャッキヤと鳴り響き、みんな、もっともっと楽しい気分になって来た。と、そのとき、一人の先生が走りこんできた。「お前は今授業中だということをわからないのかッ!」「騒いでいたヤツは前に出ろッ!」。ふだん大人しい先生が、身体を震わせ逆上していた。で、気圧されて、誰も名乗り出なかった。イヤ、名乗り出ることが出来なかった。そしたら、「一列に並べ!」という声が終わるか終わらないかのうちに、端からあの帳簿式になっている出席簿の角で、ばんばんばんと我々の頭を思いっきり叩き始めた。痛いなんのって、よく当たり所が悪くて……なんてことにならなくて良かったと思うくらい。後追いで声を出した小生。何故その時僕もその一人ですと前に出なかったのだらうと、もやもやが残ったことを覚えている。それよりも、天井の白さ、その時の声の反響、そしてあの痛さ。それは半世紀を過ぎた今でもハッキリ覚えている。でも、あれは僕らが悪い。

さらにそれより前、小生はひどいいじめを受けたことがある。今考えてもその理由はよく分からないのだが、小学校の時ある集団からいじめられた。脚が悪くてのろまだったせいなのか、執拗に追い回され、ほんとお腹が痛くなってトイレに駆け込んだとき、こんな所に逃げ込みやがってとドアをドンドン叩かれ、怖かったことを思い出す。時々、その同級生達からクラス会のお誘いが来る。別に彼らに恨みつらみは無いのだけれど、小生、どうしても出席することが出来ない。何故かと言うと、あの時の恐怖、水洗でなかった頃のトイレの匂い、叩かれるドアの音、彼らの声、そういったものが3Dか4Dか知らないけれど匂い・色・音と共に甦ってくるからである。

中学のときはある特定の個人から狙われた。理由も無く投げ飛ばされ、我慢しようにも涙がこぼれた。担任の教師に怒られてそいつが家に謝りに来たとき、小生は「如何しよう、仕返しに来た!」と思い込み、狼狽したことを思い出す。それよりひどかったのは某体育の教師。こちらが脚の故障で（これについては話すとも長くなるので、あの戦争が一因とだけ言っておく）片足飛びも出来ないのを咎めて、「お前のようなヤツは高校には行けない」と言われた。あまりのショックに親に話し、母親が担任に相談するという段取りになった。そこで思いもかけぬことが起ったのである。前出の1年の時とは違う担任のその先生。昭和20年代の末という当時に在って、ピンクのYシャツ、ワインレッドのポケットチーフ、ポマードでかてかのオールバック、色白で話をしながらしばしば絹のハンカチで口を拭うといった具合で、蟹さんとあだ名が付き小生も敬遠していたその先生が、心底怒り、その体育教師と対決して屈服させたという、まるで学園物のTVドラマの一件がある。そのとき、身に沁みて感じたのは「ひとを見かけによって判断してはならない」ということ。件の蟹先生は、こちらが恩返しが出来ようになる前に逝ってしまわれた。てれずに御礼は早く申し上げておくべきであった。忘れ得ぬ先生である。一方、某体育教師は後日「俺はそんなつもりで言ったのではない」と、小生に向かってこちらの顔を見ないで小さな声で言い訳をした。それは絶対忘れることが出来ない。もし出会ったら、思い切りぶん殴ってやりたいという気持ちにさえなる。

何故恥を忍んでこんなことを綴ったかと言うと、昨今話題の体罰・いじめ。教員・部長、監督・コーチ。いずれも学生・生徒より強い立場にある人間である。上級者にしても然り。強い人間が弱い者をいじめたり、体罰を加えては絶対にいけない。いじめ・体罰の撲滅にぜひともご協力を仰ぎたい。

目次

巻頭言

第51回大会 研修会報告

第2回全日本教育系学生バドミントン選手権大会報告

平成24年度全日本総合バドミントン選手権大会レポート

平成二十三年度総会資料

(本来は九二号に掲載するところですが、五〇周年記念号として編集している中で抜け落ちてしまいました。申し訳ありません。改めて提示しますのでご覧になって下さい。)

表紙の人